

インバウンド観光におけるムスリム対応の現状と課題

佐々波, 弓子 / SAZANAMI, Yumiko

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政地理 / JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY

(巻 / Volume)

45

(開始ページ / Start Page)

71

(終了ページ / End Page)

80

(発行年 / Year)

2013-03-21

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00011633>

インバウンド観光におけるムスリム対応の現状と課題

佐々波 弓子

近年の訪日外国人旅行者数は、日本政府によるビジット・ジャパン・キャンペーンや、中国人旅行者に対して観光ビザの発給を緩和・拡大するなどの施策を行った結果、その数が激増してきた。しかし、長期的なインバウンド観光の振興を図るには、今後訪日旅行者数の増加が見込まれるアジア諸国からの観光客、その中でも特にアジア地域に集住しているイスラム教徒（以下ムスリム）に対する受け入れ態勢を整えておく必要がある。そこで、日本人にとってあまり馴染みのないイスラム教に関する正しい知識を持った上で、サービスを提供する必要性があると考え、日本滞在のムスリムとホテルなどの受け入れ側への聞き取り調査を実施した。

その結果、ムスリムに対する調査では、食事と礼拝に関する知識不足、理解不足に伴う困難性の指摘が多く、その要因を示すキーワードとして「情報」・「入手性」・「正確性」・「解釈」・「言葉」・「理解度」が引き出された。

キーワード：インバウンド観光、イスラム教、ハラル、ハラルフーズ、礼拝。

Keywords : Inbound tourism, Islam, Halal, Halal foods, Prayer.

I はじめに

1 問題の所在

観光庁(2011)によると、2010年度の都道府県別外国人延べ宿泊者数では、東京都が1位で890万人(全体に占める割合の34.0%)、次いで大阪府が322万人、3位が千葉県で212万人となり、上位3都府県で全体の半数以上を占めている。この結果は、中国人観光客がパッケージツアーで訪れる、いわゆる「ゴールデンルート」¹⁾が貢献していると考えられる。しかし、ビザ取得の規制緩和により、韓国人と台湾人の訪問地が拡がり多様化を見せたのと同様に、中国人旅行者の行動も今後変化することが予想される²⁾(金：2009)。

一方、地方においては、北海道のニセコに例を見るように、優良な自然資源を活用したスポーツ・ツーリズムが活発化し、外国人旅行者が増加傾向にある(杉谷ほか：2011)。またヘルス・ツーリズムやグリーン・ツーリズムなど新たな分野での観光旅行の開拓に関する研究(例えば、筒井・澤端：2010)や振興が進められている(観光庁：2011)。

このように近年インバウンドツーリズム³⁾の形態は変化しているが、加えて2010年には新規航空路線が開設されたり、増便が相次いでいる⁴⁾。な

かでも注目すべき点は、新たに就航した5社の路線がイスラム教を国教としている地域から発着していることである。従って国際競争力の高い観光地を形成し、インバウンド観光の促進を図るためには、イスラム教を含め、訪日外国人の持つ文化や習慣を理解することが、これまで以上に重要な課題となってきた。欧米の文化や仏教・キリスト教などの宗教については、日本人もある程度理解しているし考えることができるが、イスラム教に関しては一般的に馴染みが薄いため、インバウンドツーリズムの促進のために、その知識を国全体で共有すべき課題である。今後さらにグローバル化が進むことで、多国籍企業も増加し、観光客の移動がなお一層活発化することが予想されることから、観光分野からの視点でイスラム教を研究することは重要であると考えられる。

しかしながら、観光資源としての宗教を取り上げた研究(例えば、山中：2008)や、在日ムスリムに対する生活の実態調査(早稲田大学人間科学学院アジア社会論研究室：2006)はあるが、インバウンド観光におけるムスリム受け入れの困難性を研究した報告はほとんど見当たらない。実践的な義務や規制が多いイスラム教については、日本人にとって身近な宗教であるとは言えず、理解度が

低いために快適な滞在環境を提供できていない場合がある。今後10年から20年後にはイスラム教を国教とする国々（以下イスラム国）がインバウンド観光の重点市場になり得る可能性も秘めていることから、受け入れ準備を整えておく必要がある。

2 研究目的と手法

以上の背景から、本稿は日本におけるムスリムが具体的にどのような状況において滞在の困難性をきたしているかを明らかにすることを目的とする。そのうえで、まず日本におけるインバウンド観光の現状を明らかにする。次に「イスラム国からのツーリストの増加が見込まれる」という市場予測に基づき、受け入れ側として知っておくべきイスラム教の実践的な規律について述べる。これらを踏まえて聞き取り調査を行った。

日本に滞在中のムスリムへの聞き取り調査及び書面によるアンケート調査では、食事と礼拝に細かい質問項目を加え、「日本滞在において困難な点」を尋ねた。ホテルなど受け入れ側に対してはムスリム客に対する特別な配慮に関する調査を

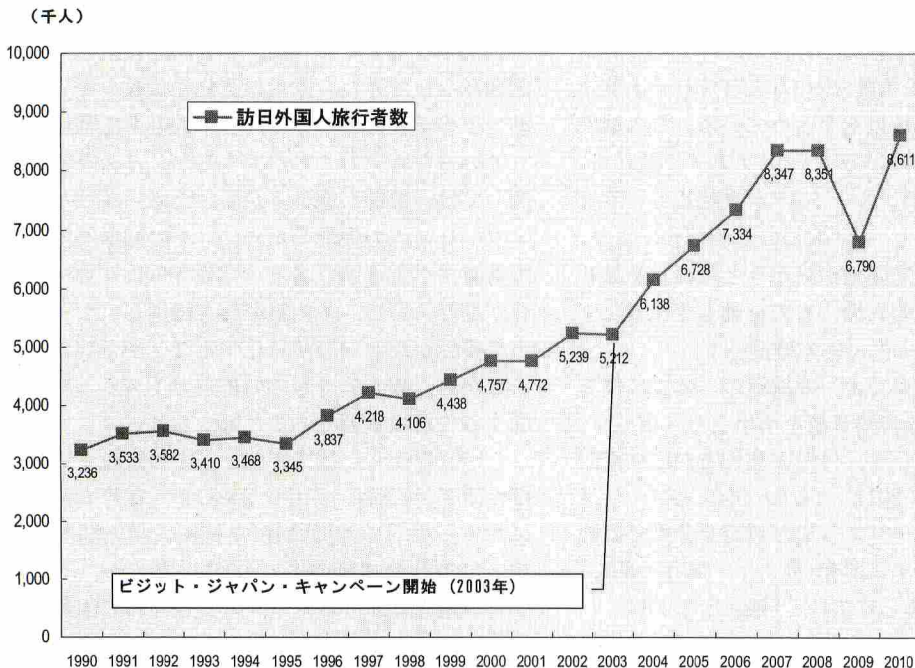
行った。最後にすべての調査結果から、滞在の困難性と結びつくキーワードを探し出し、困難性を感じる原因と側面について分析し、残された課題をまとめた。

II インバウンド観光の現状

1 ビジット・ジャパン・キャンペーン

観光庁(2011)によると、ビジット・ジャパン・キャンペーン(以下VJC)事業では、旅行者の増加が見込める15の国・地域⁵⁾を市場対象とし、特に東アジアの4つの国・地域(韓国、中国、台湾、香港)を当面の最重点市場と位置付けて、訪日旅行促進のための宣伝活動を行っている。当面の目標として訪日外国人旅行者数を2013年までに年間1,500万人に、将来的には3,000万人に達成させることを目指している。キャンペーン開始当時の2003年が521万人であった事実と比較すれば、現在まで順調に増加しているといえる(第1図)。なかでも特徴的なのは、2009年の世界的な経済の低迷に加えて新型インフルエンザの影響により、中国を除く上位

14カ国・地域の全てからの旅行者が一時的に減少したにもかかわらず、同年の中国からの旅行者数のみは増加している点である。この要因としては、2009年7月に、それまで団体客のみに発給していた観光ビザを、限定的ではあるものの、富裕層へ



インバウンド観光におけるムスリム対応の現状と課題

の個人観光ビザの発給を緩和・拡大したことが挙げられる。その後も中国に対してはビザ発行の緩和策を次々に実施し、受け入れ環境を整えている。

一方、2010年12月には、マレーシアの格安航空会社(以下LCC)であるエア・アジアが東京国際空港(以下羽田空港)とクアラルンプール間に就航した。この影響を受けて2011年1月のマレーシアからの訪日外国人客数は、前年同月比で45%増の6,800人⁶⁾となり、その効果が歴然となった。LCCの就航は一民間航空会社の新たな乗り入れにすぎないが、訪日外国人客数の増加に大きく貢献しているといえる。

2 インバウンド観光における今後の展開

長期的なインバウンドの振興を図るならば、今後人口が増加し、経済発展が期待される現在のVJC重点国以外のアジア諸国をターゲットに加える必要がある。内閣府による2020年代の予想によ

ると、いわゆるNIES各国の潜在的な経済成長率が大幅に鈍化するのに対し、インドネシア、マレーシア、フィリピンは、鈍化の幅が比較的小さいとしている(内閣府政策統括室：2010)。また2030年には世界人口の上位5カ国は、中国、インド、アメリカ、インドネシア、パキスタンとなり、これら5カ国で世界人口の47%を占めると見込まれている。これらのことから、人口の増加に伴い、長期に渡って経済成長が見込まれる国々は、イスラム教国が多いと言える。2009年の統計によると、世界のムスリム数は約16億人で、世界人口の約23%を占めている。ムスリムは五大大陸全てに居住しているが、そのうち60%にあたる10億人はアジア圏に、約20%が中東と北アフリカに居住している(Pew Research Center：2009)(第2図)。以上の点を考慮すると、今後10年間の訪日外国人においては、ムスリムの比率が増加することは確実であり、日本人にとってあまり馴染みのないムス

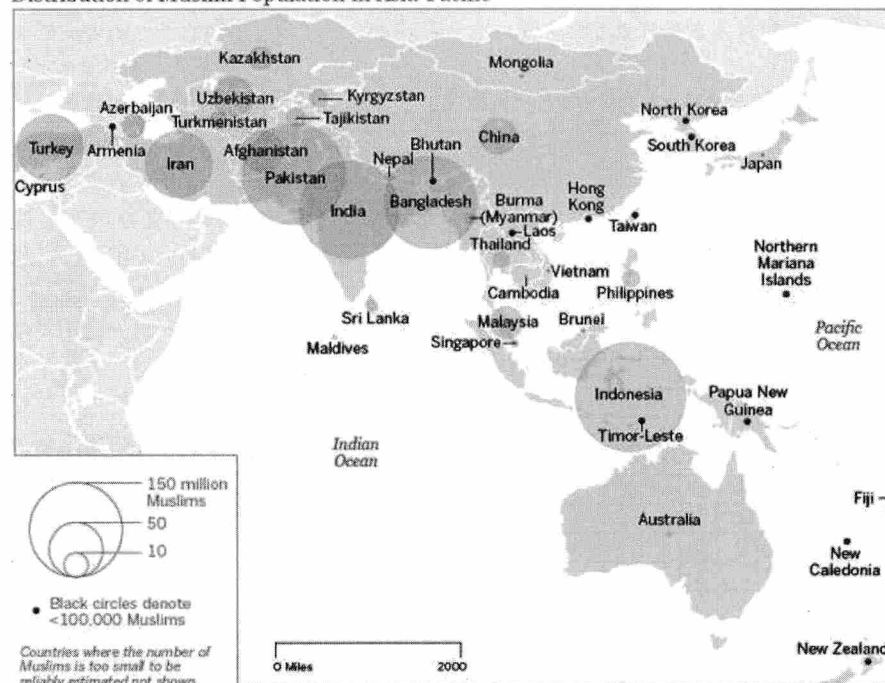
リムの受け入れ対策を整えておく必要がある。

Ⅲ イスラム教に関する理解

ムスリムが非イスラム国に滞在する場合、一般的に困難性が予想される習慣として食事と礼拝が挙げられる。

財団法人食品産業センター(2009)によると、ムスリムにとって忌避となる食材は、「豚」「アルコール」「血液」「宗教上の適切な処理が施され

Distribution of Muslim Population in Asia-Pacific



Pew Research Center's Forum on Religion & Public Life • Mapping the Global Muslim Population, October 2009

第2図 アジアのムスリム人口分布図

(Pew Research Center's Forum on Religion & Public Life 2009報告書より引用)

ていない肉」である。特に「豚」に関しては「ブイヨン」「ゼラチン」「肉エキス」などに豚の肉や骨が使われている場合が多く、例えばスープの具に豚肉が入っていないとしても、「出汁」として使われている可能性がある⁷⁾。アルコールは日本料理に頻繁に使用される「みりん」「料理酒」や、洋菓子の香りづけに使われる「ラム酒」なども含まれる。「血液」は不浄のものとして忌避されており、肉や魚料理においては、よく火を通す必要がある。「宗教上の適切な処理がされていない肉」とは、イスラム教で決められた方法で屠殺された「ハラールミート」以外の肉である。

ムスリムに義務付けられている礼拝は、早朝、昼、午後、日没、夜の1日5回5分から15分程度、決められた時間に行う。メッカのカーバ聖殿の方向に向かって行うが、清潔な場所であれば、どこでも可能である。

IV 日本滞在中のムスリムに対する調査

本稿ではインバウンド観光におけるムスリム受

け入れの具体的な困難性を明らかにするために、日本に滞在、または滞在経験のあるムスリムへ聞き取り調査を行った結果を報告する。

1 対象者の属性

調査は2011年8月に実施し、その時点で日本に滞在していたムスリム計19人と、2007年に就業先の社員旅行で東京を訪れた経験がある1人を対象に行った⁸⁾。

偏りのない結果を得る為に、学校や企業といった組織の中にいる人や、短期滞在の観光客など、あらゆる方面からの意見を聞いた(第1表)。

2 調査内容

質問内容は、日本滞在中に「ムスリムとして困難に感じること」、「食事について困難に感じること」、「礼拝について困難に感じること」の大きく3項目である(第1表)。食事と礼拝について詳しく調査した理由は、非イスラム国とイスラム国において決定的に違う習慣を持つことから、困難を感じている可能性が高いと予想したためである。

第1表 対象者の属性と滞在中の困難性の概要

調査対象者	滞在予定期間	訪日回数	訪日目的	個人/団体	年代	国籍	職業	性別	滞在中の困難性	食事問題
1	8日	2回以上	休暇	個人	30	英国	会社員	男	有	有
2	NA	2回以上	仕事	個人	10	マレーシア	会社員	男	無	無
3	8日	2回以上	休暇	個人	20	英国	学生	女	無	有
4	9日	初めて	仕事	個人	40	マレーシア	会社員	男	有	NA
5	NA	初めて	仕事	個人	40	マレーシア	会社員	男	無	有
6	2週間	初めて	休暇	団体	20	インドネシア	学生	男	無	無
7	10か月	初めて	研修	不明	30	インドネシア	会社員	男	有	無
8	2年	初めて	研修	団体	20	インドネシア	会社員	男	有	無
9	1年	初めて	留学	不明	20	インドネシア	学生	男	有	NA
10	8年	2回以上	留学	個人	30	インドネシア	学生	男	無	有
11	6か月	初めて	仕事	団体	20	インドネシア	会社員	男	有	有
12	2年半	初めて	仕事	団体	20	インドネシア	会社員	男	有	有
13	3か月	初めて	仕事	個人	20	インドネシア	会社員	男	有	有
14	NA	初めて	休暇	個人	20	マレーシア	学生	女	無	無
15	4年	NA	留学	個人	20	マレーシア	学生	女	無	無
16	3か月	初めて	留学	個人	20	ウズベキスタン	会社員	男	無	有
17	1週間	2回以上	休暇	個人	40	マレーシア	会社員	男	有	NA
18	1週間	2回以上	休暇	個人	30	マレーシア	会社員	女	有	NA
19	5年	不明	仕事	個人	40	バングラディッシュ	飲食業	男	無	NA
20	6日	初めて	旅行	団体	30	マレーシア	会社員	女	有	有

(聞き取り調査より作成)

(NA = データなし)

3 調査結果

1) 全体の概要

第1表より、まず「滞在中全般において困難に感じることがある」と答えた人は20人中11人で、そのうち9人が食事、8人が礼拝の問題を挙げている。また9人が「日本滞在中において困難な事は無い」としながらも、食事と礼拝に質問項目を別けてそれぞれ詳細な質問を行うと(第2表、第3表)「困

インバウンド観光におけるムスリム対応の現状と課題

難を感じる」と答え、そのうち2人が食事、1人が食事と礼拝、1人が礼拝の問題を挙げている。全体では20人中15人、75%の人が食事または礼拝に問題があることが明らかになった。

2) 食事に関する困難

第2表は食事に関する困難性について、その具体的内容を記したものである。食事に関しては、20人中16人が何らかの困難や不便を感じている。「問題が無い」と答えた4人のうち3人は自炊を行っていることから、わが国の外食産業の提供形態についてはムスリムに全く対応していないと言える。一方、自炊の3人はインターネットによ

り、日本のハラルショップからハラル食品⁹⁾を購入している¹⁰⁾。

困難や不便を感じる内容は、原料が不明である、英語の表記が無い、ハラルレストランが無い・少ない・探すのが大変など、外食に関する問題を挙げている人が14人で、滞在の長短に係らず不満を持っていることが明らかになった。インターネットを使ってハラルレストランを探している、と回答する人も多かった。しかし、日本においてのハラル制度は、いくつかの団体が独自の基準でハラル認証を与えているなど、実際にはイスラム国で各政府が認証している基準とは大きく異なる店も

第2表 食事に関する困難の内容

調査対象者	食事の問題		食事提供	どのような食事を摂っているか	レストラン探す問題	次回日本食を持参するか			
1	有		無	寿司, マクドナルド, バーガーキング, ベジタリアン	有	英語表記がない 原材料が不明	いいえ		
2	無		有	NA	有		いいえ		
3	有	ハラルレストランを探すこと	無	朝食, 昼食, 夜食	有	本当のハラルフードを見つけること	はい	レストランを探すのが大変	
4	有	自分たちで自分の食事はアレンジしている	無	パン, 野菜, ごはん	有		はい	たぶん	
5	有		無	パン	有		はい		
6	無		時々無	ごはん, さかな, 牛肉, 鶏肉	NA		いいえ	提供されていたから	
7	無		有	牛肉, 鶏肉	NA		はい	味が (合わない?)	
8	無		時々無	NA	有	ハラルレストランが少ない	はい		
9	有		無	NA	有		はい	準備のため	
10	有		時々無	NA	有		NA		
11	有		時々無	NA	有		はい		
12	有		時々無	魚	有		はい		
13	有	ムスリムに禁止されている食べ物がある	無	ごはん, さかな, 鶏肉	有	ハラルフードとレストランが少ない	はい		
14	無		無	自炊	無		NA		
15	無		無	自炊, シーフード, 和食みりんは問題	無		はい	長期滞在で自炊のため	
16	有		時々無	自炊, 鶏肉, 牛肉	無		いいえ		
17	有		無	サラダ, パン (ホテル), スープは何が入っているかわからないからダメ	有	店が少ない 英語表記	NA		
18	有		無	サラダ, パン (ホテル), スープは何が入っているかわからないからダメ	有	店が少ない 英語表記	NA		
19	無		NA	自炊	無	英語表記がない 店が見つけられなかった	NA		
20	有	同じ皿に豚肉と鶏肉が一緒に出てきて食べられなかった 和食ばかりでうんざり	無	インド料理, 和食	有		はい	マギーミーを持ってくる	

(聞き取り調査より作成)

(NA = データなし)

第3表 礼拝に関する困難の内容

調査対象者		礼拝の問題	方角をどのように知るか	空港内に礼拝所が無いことについて
1	無	ホテルの部屋で礼拝する	コンパス、ツール	多くの国際空港には礼拝所があるので日本もそうすべきだ
2	無		コンパス	NA
3	無		ツール	多くの国際空港には礼拝所があるので日本もそうすべきだ
4	有	モスクを探すことと祈る方角	その他	礼拝可能
5	無		コンパス	小さな礼拝用のスペースが必要
6	無	提供されている	その他	礼拝場所を提供してもらいたい
7	有	礼拝部屋が無い	ツール	あったほうがよい
8	有		コンパス	良くない
9	有	大学内に礼拝所が無い	コンパス	礼拝所が必要
10	有	モスクが少ない	ツール	礼拝が難しい
11	有		コンパス	NA
12	有		コンパス	NA
13	有	モスクが少ない	コンパス	日本政府は空港内に礼拝所を作ることが望ましい
14	NA		NA	NA
15	NA		コンパス	NA
16	無		ツール	問題なし
17	NA		コンパス	NA
18	NA		コンパス	NA
19	無	家で礼拝する 一日一回	家でわかる	NA
20	無	移動のバスの中で礼拝できる	コンパス	NA

(聞き取り調査より作成)

(NA = データなし)

存在する¹¹⁾。

3) 礼拝に関する困難

第3表は礼拝に関する困難性について、その具体的内容を記したものである。礼拝に関しては、20人中8人が何らかの問題を持っていることが分かった。このうち7人が3ヶ月以上の長期滞在者であり、モスクを探すことや礼拝する場所が無い、という回答を寄せた。長期滞在者は学校や職場での拘束時間があり、礼拝の時間を確保できなかったり、礼拝をするための静かで清潔な場所を確保することが難しいことが予測される。これに対し、旅行者はホテルの部屋で行ったり、時間に縛られずに礼拝できるということから、礼拝に関しては必ずしも問題を感じていないと思われる。

また国際空港における礼拝所については9人が必要としているのに加えて、20人中18人が礼拝する方向を知るためにコンパスを持参していることから、いかに礼拝がムスリムにとって日常的なものであるかということが分かった。第3図では、礼拝所の案内がトイレのマークの横にピクトグラムで表示されていることから、礼拝所が日常生活

に欠かせないものであることがうかがえる。



第3図 ショッピングセンター内の礼拝所の案内ピクトグラム
(マレーシア・クアラルンプール市内、2011年筆者撮影)

V 受け入れ側の対応に関する調査

1 調査概要

本章ではムスリムのツアーにおいて、ツアー作成者であるクアラルンプールの大手旅行代理店¹²⁾

インバウンド観光におけるムスリム対応の現状と課題

に対し「ムスリム専用パッケージツアー」について、その特徴と日本での参加客に対する配慮に関する聞き取り調査を行った。次にこのツアーで利用している日本のホテル2ヶ所¹³⁾に対し、ムスリムの宿泊客に対する配慮について、電子メールで問い合わせを行うことによって、その具体的内容を明らかにするよう努めた。さらに主に発展途上国の人々を対象とした研修施設及び宿泊施設であるJICA横浜に対して、ムスリムへの特別な配慮について聞き取り調査を行った。最後に成田国際空港(以下成田空港)と羽田空港に対して、レストランおよび礼拝所についての聞き取り調査を行うことにより、わが国におけるムスリム対応の実態解明を試みた。

2 調査結果

1) ツアー宿泊ホテルと短期滞在施設の対応

マレーシアの旅行代理店の話によると、日本へのムスリムツアーの特徴としては、日本での長期滞在経験があり、日本に精通した添乗員が同行し、ツアー客の要望など全てに対応している点が挙げられる。ムスリム専用ツアーでは礼拝の場所と時間をアレンジし、食事はトルコ料理やシーフードレストランなど豚肉との接触が無い店を設定している。

聞き取り調査を実施した2つのホテルでは、ムスリム客に対して食事のみ配慮しており、どちらもbuffetスタイルでゲストに食べることできる料理を選んでもらう方法をとっている。また食事の前にツアーガイドを交えて料理や調理方法の説明をし、料理皿の前に使用している材料を表記するなど、ゲストが安心して食事ができるように工夫している。

JICA横浜でも食事のみに配慮を行っており、食堂にハラルミートを使用したメニューとベジタリアンメニューを常時4品目用意して対応している。

2) 空港の対応

国際空港の調査結果は次のとおりである。まず成田空港には礼拝所は無いが「サイレンスルーム」が設置されている。ここは礼拝や瞑想など多目的

に利用できるスペースとなっている。しかし、サイレンスルームの入り口に表示は無く、利用の際には係員に部屋の開錠を依頼し、氏名等記入した用紙を提出する必要があるなど、利用手続きが大変煩雑である。

一方、空港内のレストランに関しては、ベジタリアンやハラルレストランは無いものの、到着ホールにあるインフォメーションでは空港近辺のベジタリアンレストランの案内を行っている。しかし、定期的に情報の更新を行っているわけではない。

次に羽田空港には、礼拝所および礼拝ができる専用の場所は設置されていない。また空港内のレストランにはベジタリアンやハラルレストランは無い。しかし、店舗によってはベジタリアンに対応可能¹⁴⁾な店もあり、各店の対応内容等を案内したファイルをインフォメーションに用意している。

VI 調査結果の分析

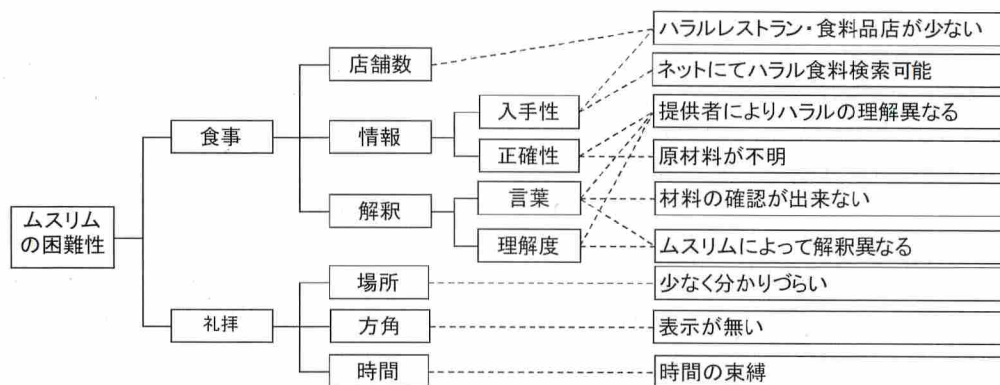
1 ムスリムの困難性の要因

以上の結果をふまえると、ムスリムの日本滞在における困難性は大きく「食事」と「礼拝」に分けられる。それぞれの問題についてその原因となる要因を導き、その関連性を図式化すると第4図のようになる。

2 食事の困難性の要因

日本滞在中におけるムスリムの困難性の調査結果と要因分析により明らかになったのは、食事では「情報」の「入手性」「情報」の「正確性」と「解釈」における「言葉」「理解度」という4つのキーワードの重要性である。これらのキーワードはムスリムの食事に関する困難性を引き起こすものと、解決するもの双方に重要な役割を持っていると考えられる。

調査によると、インターネットでの検索が可能で、「情報」があれば、ハラル食品を購入することも、外食することも可能である。しかし、その「情報」の内容が「提供者によって理解が異なる」こと



第4図 日本滞在におけるムスリムの困難性に関する要因分析図(筆者作成)

や「原材料が不明」という問題もあり、「正確性」に違いがある。その原因としては「ムスリムによって解釈が異なる」部分もあるため、双方の「理解度」が重要になってくる。そしてそれを補うものとして原材料を確認するための「言葉」の理解が必要になる。

ハラル制度が確立も普及もされていない日本の現状を考えると、提供者及びムスリムの理解度や解釈を統一することは難しく、原材料にまで至る正確な情報をムスリムが入手しやすい方法で提供し、それを補うコミュニケーションのサービスを検討する必要がある。ツーリズムの観点では、そうした情報の「通訳者」の存在が重要になってくる。

3 礼拝の困難性の要因

礼拝については、ツーリズムの観点から考えると、ほとんどの人がコンパスを持参し「方角」を知ることが可能であり、時間の束縛が少ないので、礼拝の「時間」を比較的自由に取ることが可能なが分かった。

礼拝の「場所」については、空港に礼拝施設の設置を希望するという意見が多くあり、現状では成田空港にあるサイレンスルームを誰からも分かりやすく、また利用しやすくする必要が求められているといえよう。

第4図で示したキーワードを受け入れ側として理解さえしていれば、たとえインフラとしての礼

拝所やハラルレストランが無くても日本に滞在するムスリムが持つ生活の諸問題は解決できると考えられる。しかし、ムスリムの観光客としては、旅先で何も心配せずあたかも自国のように食事ができるハラルレストランが存在することは、大きな安心感を得られると思われる。その点では、日本においてもハラルレストランを名乗るならば、その基準を店舗同士、さらには業界全体で統一させ、客に周知させる必要がある。

VII おわりに

以上、本稿では、日本滞在中におけるムスリムの困難性に関して述べてきたが、最も困難を感じるものは「食事」であった。ハラル食品やハラルメニューが無い場所での滞在では、ムスリムが各自の許容範囲により食べるものを選択するのが一般的である。それゆえメニューの原材料などは、いつでも正確な情報を提供できることが必要とされている。つまり困難性を感じる度合いは、個々の信仰の深さと許容範囲、困難を解決するための情報の有無、その情報の正確度を確認するための言葉の理解度が大きく影響していた。

今後残された研究課題の第1は、マレーシアやインドネシア以外のイスラム国での対応を調べる必要があること。第2は日本でのムスリムへの対応を考えるために、ムスリムが多く居住する他の多民族国家の対応を調べる事が挙げられる。こ

インバウンド観光におけるムスリム対応の現状と課題

の2点を総合的に調査することにより、今回の結果以外の困難性あるいは容易性を引き出せる可能性がある。

現在の政府の政策の中で、日本人の「おもてなし」というソフトの面を前面に押し出し、「如何にして外国人観光客に、好印象を持って帰国してもらうか」という点が強調されている。しかし、それ以上に、「行きにくい国」にならない対策が必要である。

謝 辞

本稿は法政大学に提出した2011年度卒業論文の一部に加筆・修正をした。長きに渡りご指導いただきました法政大学地理学科の伊藤達也先生に心から感謝を申し上げます。

また、聞き取り調査及びアンケート調査にご協力くださいました皆様、オークラ・アクトシティホテル浜松様、山梨県河口湖・富士見華ホテル様、お忙しいなか快くインタビューにお答えいただいたApple vacations and conventionsのZulkefli Mohamed Yusoff様、JICA横浜国際センターの大川様、東京ジャーミーの下山様に厚く御礼申し上げます。

注 記

- 1) 東京—大阪ルート。典型的な目的地は東京、横浜、箱根(富士山)、名古屋、京都、大阪であった(金, 2009)。
- 2) 訪日外国人旅行者については、平成23年2月までは前年を上回る推移を示していたものの、東日本大震災が発生した同年3月は前年同月比49.7%と大幅に減少した(国土交通省観光庁編, 2012)。
- 3) いわゆる外国人による訪日旅行。
- 4) たとえば中国の春秋航空が茨城空港に、マカオ航空、エティハド航空、エミレーツ航空、カタール航空が成田空港に、マレーシアのエア・アジアが羽田空港に就航した。
- 5) 韓国、台湾、中国、香港、タイ、シンガポール、マレーシア、インド、オーストラリア、米国、カナダ、英国、ドイツ、フランス、ロシア。
- 6) 2010年12月には前年同月比17.7%増加した。
- 7) 2001年インドネシア味の素株式会社において、同社の製品である「味の素」の製造過程で、イスラム教で摂取を禁じられている豚の成分を原料とする酵素を使用していたとされ、同社社長が現地警察に一時拘束された。(http://www.ajinomoto.co.jp/2001_01)
- 8) 内訳の詳細は以下の通りである。

- ・ 日本企業に就業中または留学中の8人に対しアンケート用紙による調査。
 - ・ 東京都渋谷区のトルコ系モスク・東京ジャーミーに依頼し、見学や礼拝に訪れた5人に対してアンケート用紙による調査。
 - ・ 浅草、秋葉原、エア・アジア機内(ハネダークアラルンプール)において対面調査計6人。
- 9) ハラル制度は、イスラム教の教義に従った食品等の規格の管理とその振興を図る制度であり、イスラム教の禁ずる豚やアルコールを含まない安全な食品等の規格を定めている。審査に通過したもののみがハラルとして認証される。ハラル認証マークが表示されている食品は、ムスリムが安心して食べられるという目安になっている。(財団法人・食品産業センター, 2009)
 - 10) 日本在住のムスリムの食事に関する工夫については(樋口・丹野, 2000)が論じている。
 - 11) インターネット上では、ハラルレストランを紹介しているサイトが複数あり、実際にその中のレストラン数件に電話で問い合わせた。「客がハラルの肉を希望する場合は事前に予約が必要。常時用意していない」という回答をする店舗もあった。
 - 12) Apple vacations and conventions SDN. BHD.
 - 13) オークラ・アクトシティホテル浜松、山梨県河口湖・富士見華ホテル。
 - 14) メニュー以外の品でも、調理が可能であれば客のリクエストに応じるといった回答であった。

参 考 文 献

- 国土交通省観光庁編(2011): 観光白書 平成23年版。観光庁, 155p.
- 国土交通省観光庁編(2012): 観光白書 平成24年版。観光庁, 149p.
- 金 玉実(2009): 日本における中国人旅行者行動の空間的特徴。地理学評論, 82-4, pp.332-345.
- 財団法人食品産業センター (2009): 平成20年度農林水産省総合食料局補助事業東アジア産学官ネットワーク機構支援事業: マレーシアHalal制度の概要。http://www.shokusan-shien.jp/sys/upload/166pdf7.pdf (平成24年12月23日検索)
- 杉谷正次・青木 葵・石川幸生・御園慎一郎・杉浦利成(2011): スポーツ・ツーリズムの可能性を探る—国際リゾートをめざす北海道ニセコ地域の事例から—。愛知東邦大学東邦学誌, 40-2, pp.1-15.
- 筒井一伸・澤端知良(2010): 調査報告 外国人観光客を対象としたグリーン・ツーリズムの可能性と課題—マーケティング分析の視点から—。E-journal

- GEO, 5-1, pp.35-49.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/ejgeo/5/1/5_1_35/_pdf (2012年12月23日検索)
- 内閣府政策統括官室(経済財政分析担当) (2010): 世界経済の潮流2010年 I 第2節アジアの長期経済見通し.
http://www5.cao.go.jp/j-j/sekai_chouryuu/sh10-01/pdf/sl-10-2-2.pdf (平成24年12月23日検索)
- 山中 弘(2008): 長崎カトリック教会群とツーリズム.
筑波大学哲学・思想学系哲学・思想論集, 33, pp.176-155 (L1-L22).
- 早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室(2006): 在日ムスリム調査関東大都市圏調査第一次報告書, 84p.
- Pew Research Center (2009): Pew Research Center's Forum on Religion & Public Life 2009.
<http://pewforum.org/Mapping-the-Global-Muslim-Population.aspx> (平成24年12月23日検索)
- 樋口直人・丹野清人(2000): 食文化の越境とハラール食品産業の形成—在日ムスリム移民を事例として—. 徳島大学社会科学研究, 13, pp.99-131.